

作者は何をしようとしているのか？ 菅原百合絵

二〇二〇年に田中翠香の「光射す海」が角川短歌賞を受賞してから約五年。当該連作を含む『パーフェクトワールド』が刊行された。「光射す海」は戦場カメラマンが内戦中のシリアに赴き、その惨状をとらえ、脱出するまでを描いた連作だが、作者は実際には戦場カメラマンではなく、連作は「想像と虚構」によってつくったものであると受賞後に明かし、短歌と虚構をめぐる問題について多くの議論が交わされた。

・頑丈で扱いやすく替えがきく少年兵とカラシニコフは

・もう死んだ乳児であれば瓦礫から引き上げるとき片手で掴む

これらは戦争の悲惨さを詠う強いインパクトを持った歌であり、作者の経験の如何が歌の価値を毀損することはないだろう。

興味深いのは『パーフェクトワールド』という歌集の徹底した虚構性である。この本を読んでいくと、歌集全体の語り手Ⅱ作中主体は（作者とは異なり）考古学を専攻し、中東で発掘作業に従事し、日本に帰国して職を得た人物だと分かる。歌集の冒頭には、この語り手Ⅱ作中主体が愛読していた歌集として、雪屋敷千紘という架空の人物の架空の歌集のタイトルが掲げられ、彼女の歌集からの抜粋として複数の連作が歌集に挿入される。さらに、この語り手Ⅱ作中主体が発掘に訪れたシリアで会った戦場カメラマンの体験を歌にしたものとして「光射す海」が挿入されているのだ。

つまり『パーフェクトワールド』の作中主体Ⅱ語り手は作者ではなく、この歌集全体が雪屋敷千紘という謎めいた虚構の歌人の現実には存在しない歌集を軸に展開してゆくとともに、それとは別の戦場カメラマンを作中主体とした連作を展開するという、きわめて複雑で重層的な構造がここには見出される。

この時評で問題にしたいのは「それによって作者は何をしようとしているのか？」ということである。作者自身の作品としてではなく、架空の考古学者、彼が愛好する架空の歌人、彼が出会った架空の戦場カメラマンの体験を作品化したものとして連作群を読者に差し出すことにはいかなる必然性や意味があるのか。結論を端的に言えば、この歌集にそれを見出すのは難しいのではない。

たしかにこれらの連作は描き分けられており、雪屋敷作品とされる歌にはファンタジックな叙情性が、考古学者の連作とされる歌にはより日常詠的な軽やかなタッチが見て取れる。だがその描き分けの見事さはあくまで技術の問題であって、重要なのはその技術がいかなる意図に奉仕し寄与するのかだ。物語論的に言えば、田中による雪屋敷の「歌集内歌集」の試みや「光射す海」の連作は紋中紋であって、小説ではたとえばアベ・ブレヴォの『マノン・レスコー』やジツドの『贖金づくり』などに見られる技法である。短歌でその試みをする自体かなり革新的であり、評価に値すると言うこともできるのかもしれない。とはいえ、そのメタフィクション的実験的手法に何が賭けられているのかが見えてこない、読み手としては判然としない読後感がどうしても残る。「光射す海」をさらにもう一重の虚構のうちに包みこむことは、果たしてこの連作に新しい光を当てることになったのだろうか。